

# 山と博物館

第9巻 第1号 1964年1月25日 大町山岳博物館

年 頭 雑 感

市条例に山岳に関する一切の資料及びこの地帯における民俗、歴史その他に関する資料を収集し云々、その目的を決めている。

ところでこの資料であるが、実物教育機関としての博物館にそのねらいを達成するための資料が少なくと云うこと程、切ないことはあるまい、山博も開館以来十数年、鋭意資料収集に努力して来たつもりだが、まだまだ資料が乏しく、なやみの種となっている。

一例を民俗的な資料にとってみても一般家庭には、土蔵の片隅や物置などに普使った民俗資料として価値ある山具、農具、写真など沢山

ころがっており、じゃまになって風呂の薪がわりにしている向もないではないが、めんどうなのでなかなか出していただけくない。

建物が木造なのでちゅうちょしたり心配だったりして差控えたこともあったが、そういう物は今のうちに集めておかないとこれから先、手に入らないことにもなり、とりかえしのつかないことにもなるので、今後はこれらの資料収集に重点をおきたいと思う。とくにこの関係の資料は、みなさん方の理解や協力によって出さなければならぬ。資料は、みなさん方の理解や協力によって出さなければならぬ。資料は、みなさん方の理解や協力によって出さなければならぬ。資料は、みなさん方の理解や協力によって出さなければならぬ。資料は、みなさん方の理解や協力によって出さなければならぬ。

(藤巻厚美)



# 雷鳥・カモシカ・白鳥

## このし の 課 題 ①

### 海 川 庄 一

明けましておめでとうございます。

秘境黒部溪谷への大町ルートの解放が数ヶ月後におし迫った今日、私たちは、大町山岳博物館をはじめ関係諸機関が早急にとらなければならぬ自然保護のための諸施策の重要性をひし／＼と感じます。

ゆく年を送り、来る年を迎え、私たちも又過去十二年間の活動の積み上げの上に、以下のべるような当面する幾つかの課題と取り組み、積極的な活動を展開してゆきたいと思えますので、各界のみなさまには絶大なご援助とご指導をお願いいたします。

#### ライチョウ保護のこと

昨年は我が大町山岳博物館にとっても副期的事業である「積雪期の雷鳥生態調査」が関係各方面の暖いご援助を得て多大の困難を克服して成功裡に進められた年であります。私たち館員としては、この成果を何としても雷鳥保護のために活用し、今後、自然保護の実効を上げていかなければならないと考えております。

低地における雷鳥の人工孵化については昨年一応成功しておりますが、育雛は全く失敗いたしました。ことしこそ育成に成功し、自然の雷鳥にどのような異変が起っても飼育、増殖により絶滅の危期からは救い得るといふ最低の途だけは開きたいと念願しております。雷鳥の雛は現地の高山植物を与えなくても飼料配合宜しきを得れば身近かで手に入る餌で育て得ることは確かですが、問題は如何にし

て平地の気候に順応させ得るか、或いは高山と同じような飼育条件を人工的に作り得るかという点にあり、更に困難な点は昨年の経験よりみて病気の予防と共に、如何にして抗病性の高い雛に育て上げるかということです。

雷鳥保護は何と云っても、現地の自然環境を保全することが大事ですが、今までの生態調査の結果からみると、夏の育雛期に七〇%の雛が失なわれており、おそらく大半は天敵によるとみられるので孵化後、雛が飛べるようになるまでの間、雛づれの家族群を移動式底なし金網舎で保護してやる方法も考えられております。こうした方法による現地増殖は今のところ、資金難で足踏み状態にあります。雷鳥は国の特別天然記念物でもあり、国・県の資金的な援助を得て極力推進したいと思えます。

昭和三十五年八月二十一日、白馬岳の雷鳥七羽がヘリコプターで富士山へ運ばれ、この地に移殖されたからすでに四年目を迎えました。今まで、一・二棲息確認の情報が入っておりますが、その後果して増えているものかどうか、くわしい現地調査が必要です。当館では資金のメドさえつければ、三十九年度中に富士の雷鳥の詳しい状況を調べてみたいと考えております。この場合、北ア爺ガ岳で学んだ当館の調査方法とデータが役立つことでしょう。

雷鳥の天敵にはイヌワシ、テン、ヤマイタチなどと共にネズミも又その一員に数えられるようですが、最近のように登山者が増え、

山小屋の周辺や登山路がよこされて来ると、ネズミも増えるのではないかと心配されて来ます。

#### カモシカ保護増殖

特別天然記念物カモシカの保護については水い間、当館も意を注いで来たところであり、飼育条件下における蕃殖という目標に到達するまでには「道なお遠し」の感があります。当館で現在、飼育されている雌カモシカ「厩子」は昭和三十一年二月二日、生後満一年足らずで保護され現在に至っているものであり、年令すでに九才を越えようとしております。かつて、大阪の天王寺動物園において十一年二ヶ月の間飼育されたカモシカがおりますが、現在動物園等で飼われているカモシカのうちでは当館の「厩子」が最も長い経歴を持っているものであります。その意味でも貴重な存在でありますので、飼育データの集積には極力努力する方針です。

昨年、六月十二日、青森県下北郡大畑の国有林内において、生後間もないカモシカの赤ん坊(雄)が保護され、三ヶ月の現地飼育の後、九月十五日、当館へ入園致しましたが、賜カタルと共に、化膿性関節炎、肺虫症肋骨の骨髄炎など悪性の病気を併発して、十一月十八日死亡しました。「青太郎」と呼ばれたこのカモシカの死により、当館のカモシカ増殖計画は振り出しに戻ってしまったわけで大変残念なことであります。「青太郎」については、六十五日間の短い飼育経験ではありましたが、離乳期のカモシカ飼育に関する貴重な体験を得ることができました。

当館では現在、文化財保護委員会並びに農林省より、雌カモシカ一頭の捕獲を許可されておりますが、急峻な日本アルプスにおいて

全く無傷の状態でカモシカを生け捕るということは至難な仕事であります。然しながら、「厩子」の蕃殖年令にも限度があり、早急に雌カモシカを入手する必要に迫られておるわけであります。

#### 白鳥飼育と水禽園

一羽の大白鳥の飛来を契期として白鳥保護運動が盛り上り、地元の皆様のご協力を得て郷土の湖「木崎湖」が水鳥保護のための禁猟区に指定されたのは昭和三十六年の十一月のことでした。翌三十七年三月、皇居外苑よりコブハクチョウ一つがいを贈っていたゞき、湖畔の池で飼育してまいりました。昨年四月はじめての産卵をみたのでありますが、孵化直後に雛がネズミに喰われるという事故があり、思わぬ失敗をしてしまいました。ことは、飼育池の周囲にネズミ返しを取りつけるなど、充分な対策を講じて、コブハクチョウ増殖を成功させたいと思えます。そして、数年後には、木崎・中綱・青木の三つの湖の間を自由に白鳥が飛び回るといふような光景すらも見られるようにしたいものです。

コブハクチョウ増殖と共に、私たちが抱いているもう一つの大きな夢は、オオハクチョウの飛来とその餌付けです。この方は、相手がシベリヤから飛んで来る自然のオオハクチョウであるだけに、気永に飛来のチャンスを持つ以外に方法はないのですが、可能性は充分にあります。現在、当館では駅前水禽舎内において、かつて諏訪で傷ついて保護された雌のオオハクチョウ一羽を飼育しておりますが、これも連れ合いを見つけてやり、静かな木崎湖畔に移して出来ることなら、日本ではじめてのオオハクチョウの飼育増殖を成功させたいものです。

(山博主事)

# 懐しの爺が岳東尾根



武田 睦男

## 冬 山 序 章

「たった一週間だけだった。爺が岳東尾根の冬山。ラッセルで苦しんだこと、テントの中での楽しかった一刻、頂上での感激等のことがらが頭の中に浮んでは消え、いつまでも頭から離れることが出来ない。そして来年も登るぞと一人胸を熱くしている日が多い……」

五年程前、爺が岳東尾根を登頂してしばらくしてからの感想を会報に続った文章のひとつまでである。

今はあの頃程の感激はないにしても、冬山の厳しさのなかの美を求め、苦しみのなかから得られるなにかを期待しながら、毎年冬山へ出掛けて行くようになってしまった。

暮になると二つの種族が北ア地方を目指して訪れてくる。その一つは長い袋を持ったスキーヤー族、もう一つは買出しスタイルをした山屋たちである。この方は身なりも悪く大きな荷物を持ち、どこでもゴロゴロ寝ころんでいるので一般にはあまり好かれないようだが私もその後者の一族に分類されるようだ。ある人いわく『山の麓にいるんだから山を見ていだけでよいのに、わざわざ年末の混んだ電車に乗って山へ行くなんて、まったく気遣い沙汰だよ』と云うことになってしまいがこれもうたしかたない。

御多聞にもれず今年も山の会諸氏と冬山の素晴らしい計画をということになった。爺が岳東尾根から鹿島槍頂上、鹿島東尾根下山という縦走形式の登山であるが地元の利がかえって禍となつて、素晴らしい計画は次第に変調をきたして来た。大きな原因は人員の構成である。私自身も用事が出来て縦走が出来なくなつてしまひ計画にも穴があいて、逆コース縦走となり、爺が岳のサポート隊へと変り、鹿島丸山から標高一七〇〇メートルジャンクジョン・ピークまでは初トレースとなつてしまつた。

## 懐 しの 山 へ

大町駅で数人の会員に送られ七時三十分勇躍して出発。築場から黒沢まではバスにきりわけて一番最後に取残されてしまひ、黒沢出発九時三十分、山行するには半端な時間になつてしまつた。鹿島の河原で鹿島隊と別れて丸山の尾根に取付く、比較的よい尾根であるが数が多く、3時間もの数こぎにあえぎあえぎ丸山主尾根にたどり着き、キャンプ・サイトとは見ると一七〇〇メートルジャンクジョンは、はるか彼方にありうんざりしてしまふ

主尾根からは数も切り払われていて数こぎの心配はないがラッセルに苦しむ。三時二十分トランシーバーの交信で鹿島隊は設営を終りテントに入っているとのことでたいへんうらやましいが、できるだけサポートする任務と仮設営地を見つけるために四時まで行動して一五〇〇メートル附近に設営する。

一夜明けると幕営地への荷上げを終えなければ計画が狂ってしまうので悪天の中を天幕を徹取して登りにつく、ジャンクジョンの手前に急な瘦尾根があり、加えて猛吹雪でだいぶ苦労してしまつた。二時間半で予定の幕営地に着いてたゞちに設営を完了、鹿島隊へのサポートとしてだいぶ下まで降つたら、後発隊の一人が車の事故で急に登れなくなったので元の設営地へ戻されてしまつた。後発隊の三人も夕刻疲れた様子で登つてきてテントの中も急にぎやかになり、下から上つたジンギス汗鍋ではなやかな食卓を飾つた。

31日天候も良く下から鹿島隊の二名と大町からの二名が入幕することになり上の四名をサポートに降らせ、私ともう一人は爺が岳主稜の下見にでかけることになつた。一九〇〇メートル附近から主稜取付への下降路を見つけて、トレースを付けるのに半日費してしまつて爺が岳頂上へはついに登ることは出来なくなつてしまつたが本隊へのサポートでは仕方ない。しかし数年前の懐しい東尾根の思い出を充分かみしめながら元旦の朝下山の途にいた。

(山博調査員大町山の会)



## 冬にもりする

### ト ン ボ

倉 田 稔

アルプス下しにこごえる真冬だというのに校庭の土手に、冬の陽を全身に浴びて、2度3度と大きくはばたいているルリ色のホソミオツネントンボをみた時、不思議なほど強烈な印象を受けたのを覚えている。

成虫で越冬するトンボは日本に3種類いる大町市附近ではオツネントンボと前記のホソミオツネントンボの2種類のみられる。どちらも体長が35mm位の細いトンボで、オツネントンボは本州、北海道からユーラシア大陸全域に、ホソミオツネントンボは本州、四国、九州、朝鮮に分布している。これらのトンボは夏すぎる頃羽化して、冬までに成熟し、そのまま南向きの暖かい斜面の草むらで冬ごもりする。真冬の最中でも気温が摂氏15度前後になると翅をふるわせたり枯枝の上を移動したりしている。

そして春になると交尾し、産卵をして姿を消してしまう。冬ごもりするためにこの世に現われるトンボでもある。

(大町第一中学教諭) 枯草の中のオツネントンボ(アス)



木綿や化学繊維が衣生活において幅をきかせるようになった現代において、逆に影をひそめていったものに麻がある。「布」といえばすぐに「麻布」を指していた麻利用の盛んな時代ははるか彼方に去ってしまっただろうやら麻は去られゆく運命をもっているようだ。

北安曇地方で麻についての最も古い史料には、奈良の正倉院御物として保存されている奈良時代の天平宝字八年(今より約千二百年前)の銘のある麻製布袴があり、これには「信濃国印」の朱印が捺されている。銘中の調布というのは、正税として取り立てる稲以外のその地方における物産を租税として納めたものをいい、安曇郡前科郷(さきしなのごう)は七貴地区(現東筑明科町七貴)のあたりを指しているようであることから、当時安曇地方では麻の生産が盛んにおこなわれていて、その麻布によってこの衣袴は作られたことが知られて興味深い。しかしこれ以後江戸時代に至る間安曇地方の麻についての史料は何等見当らず、その間の事情を明らかにし得ない。

江戸時代に入って麻史料の最初のものに、大町市平林悦夫氏所蔵の控書文書がある。

山中当秋麻定之事

一他国之者山中へ入こみ、麻むぎとひろいがい仕る間敷き事  
一麻之出役之儀は、川中島なみたるべく候事

一はかりの出目之儀、川中島なみたるべし但し、川中島之一所に買い調え、其上御売成され候か、当地にてははかりの出目さへ川中島なみ上げ候はば、其麻主上方へ上させ売り候はんも、ぬし次第たる

北安曇の麻

義具幅

べく候事  
右相定むる所相違有るべからざる者也  
慶長十四年酉の十月十八日  
渡辺金内(花押)  
青山次助(花押)

倉品助之丞どの

同 忽 助どの

曾根原清左衛門どの

差出人である渡辺・青山の両名は松本領主石川三長の家老であり、また宛名の助之丞以下三人は、当時麻年寄として大町近辺に生産される麻、すなわち大町麻の支配権について領主から委ねられていた者と考えられる。文中の「山中」は大町組五郷中の山中を指すものであり、現在の八坂・美麻両村の総称であって、その東境を川中島いむゆる松代領に接していた。この松代領についていえば、現在の上水内小川鬼無里地方も麻の著名産地であり、したがって大町麻に対する領主石川氏の関心も相当に強く、これに対する取り締りとしてこの様な文書が交付されたのであろう。松本領内の麻商人はもちろんに、他国の商人までが麻を求めて山中に入りこんでいたことが文中に伺える。

小笠原氏・松平氏・堀田氏等歴代の松本藩主は、石川氏と同様大町麻の定書を交附して大町麻の保護策を講じ、その結果、大町は麻の富をもって栄えるようになるのであるが、その栽培と流通についての詳しい様子を記すことは、他日にゆずらう。

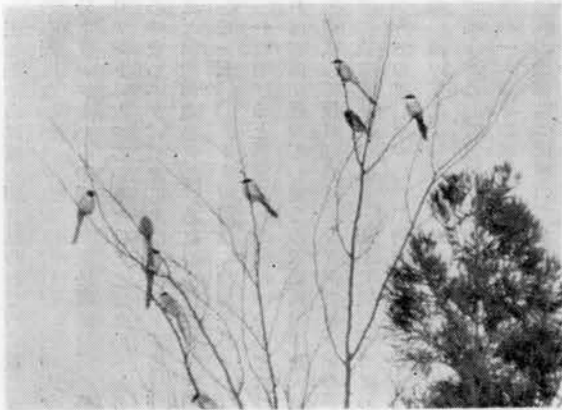
(松川小学校教諭)

× × × × × × × ×

オナガとムクドリ

長沢修介

今年の冬は例年になく雪が少なかったため、冬鳥の姿も少い。いつもの年なら一月に入ると冬鳥のツグミやレンジャクが来て取り残された庭の柿の実を啄むのだが今年はまだ一度も姿を見させてくれない。その代り留鳥や漂鳥にとっては過しやすき冬であろう。一月に入るとほんの二、三羽の群しか見られないムクドリも今年はまだ大群で毎日柿の実を啄みに飛来する。そんなギヤ、ギヤと騒がしいムクドリの中へ今日はめずらしくオナガの一群がやって来た。群と群で喧嘩が始まるかと思いついていたら何のことはない隣に止つても平気なものである。群行動をする鳥は冬季はこんなものかと感心して眺めた。



博物館ニュース

コジユケイの飼育

雪が降って山野が真白になると、小鳥たちも餌を探すのに苦労する。猟友会で毎年暮に山野に放すコジユケイもそうであろうも番殖が悪いので、今年から新しい試みとして越冬期を飼育舎で過ごし、餌も多くなる四月に放すことになり山博も協力することになった。

いま動物園にいる五羽のコジユケイがそれで、この地方ではめづらしい鳥、キジの仲間だがキジの半分位で原産は中共南部の鳥だ。

動物舎移転の準備

市のブルトーザもこのところ大繁盛で忙がしく活動しているが、暮の一日ちょっと暇ができたと云うので、山博裏山の動物舎移転予定地を地ならしてもらった。さすが75馬力、みるみる仕事を了えて、移転受人体勢ができました。

表紙説明

爺ガ岳東尾根より爺ガ岳北峯。今年は例年より雪が少なく、爺ガ岳東尾根だけで越年組11パーティーという賑やかさであった。

撮影 千葉 彬司

山と博物館 第九巻 第一号

発行所 一九六四年一月二十五日発行

長野県大町市TEL(大町)二一

大町山岳博物館

印刷所 大町市上仲町

信州印刷大町工場